

2012 年度 大学のアクティブラーニング調査報告書

(質問紙調査報告)

河合塾

2013 年 11 月

— 目 次 —

1. 質問紙調査の概要	3
2. 質問紙の内容	4
(1) 本調査で対象とする科目	4
(2) 本調査で対象とする「アクティブラーニング科目」の定義	4
(3) 本調査におけるアクティブラーニング科目の目的別分類とその定義	5
(4) 質問構成	5
3. 質問紙調査の結果分析	6
(1) 初年次ゼミ	6
(2) 課題解決を目的としたアクティブラーニング科目	14
(3) 専門ゼミ	19
(4) 卒業論文・卒業研究	21
(5) 学科の教育目標と、各履修科目の達成目標との関連の明文化	33

1. 質問紙調査の概要

■ 調査対象

調査対象は2012年度カリキュラムとした。

医・歯・薬、獣医系の6年制の学部、芸術系学部、体育系学部、医療福祉系学部等、資格取得を目的とした学部を除くほぼすべての系統のうち、下記一覧の学科系統の国公私立大学の2,231学科の学科長に対して質問紙を送付し、e-mail および郵便にて962学科から回答をいただいた(回答率43.1%)。

送付対象を学部ではなく学科としたのは、同じ学部内であっても学科によってカリキュラム編成が大きく異なる場合があるためである。また学部の中からはその学部の代表的な学科、他の大学でも多く見られる学科を抽出した。

※回答いただいた962学科は巻末に記載。

学部系統	学科系統
文・人文・外国語学系	日本文学系、英米文学系、外国語・コミュニケーション学系
社会・国際学系	社会学系(観光・ジャーナリズム含む)、国際関係学系
法・政治学系	法律系、政治・行政学系
経済・経営・商学系	経済学系、経営学系、商・会計学系
教育・教員養成系	教育学・教育心理学系、小等・中等教育教員養成課程(国語科、数学科)
理学系	数学系、物理系、化学系、
工学系	機械工学系、電気・電子工学系、通信・情報工学系、建築学系
生物生産・応用生命学系	生物生産学系、応用生命学系
総合・環境・人間・情報学系	総合政策学系、環境科学系、人間科学系、情報メディア学系

■ 調査時期

質問紙発送：2012年12月

質問紙回収：2013年1～3月

■ 系統別質問紙送付、回答状況

系統	送付 学科数	回答 学科数
文・人文・外国語	364	175
社会・国際	200	90
法・政治	148	68
経済・経営・商	418	127
教育・教員養成	67	23

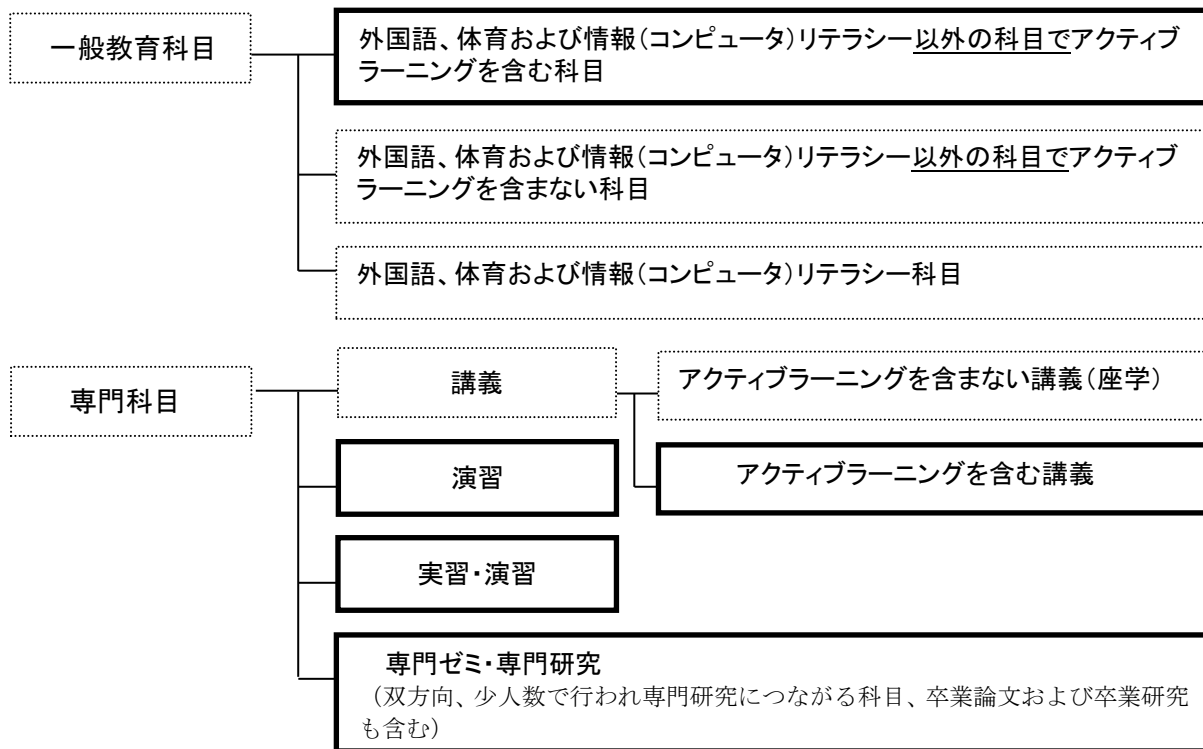
系統	送付 学科数	回答 学科数
理	187	62
工	552	244
生物生産・応用生命	109	29
総合・環境・人間・情報	186	82
総計	2231	962

回収率	43.1%
-----	-------

2. 質問紙の内容

(1) 本調査で対象とする科目

2012年度のカリキュラムにおいて下図の太線枠に該当する科目を今回の調査の対象とした。



＜除外する科目＞

a. 就業支援科目は除く。
2011年4月から義務化された社会的・職業的自立に関する指導等には、面接指導、履歴書の書き方、資格取得講座などの「就業支援科目」と、学生の職業観、勤労観を育むことを目的としたキャリア形成支援に関わる取り組みなどの「キャリアデザイン科目」に分けられる。このうち、「就業支援科目」は調査対象から除外する。

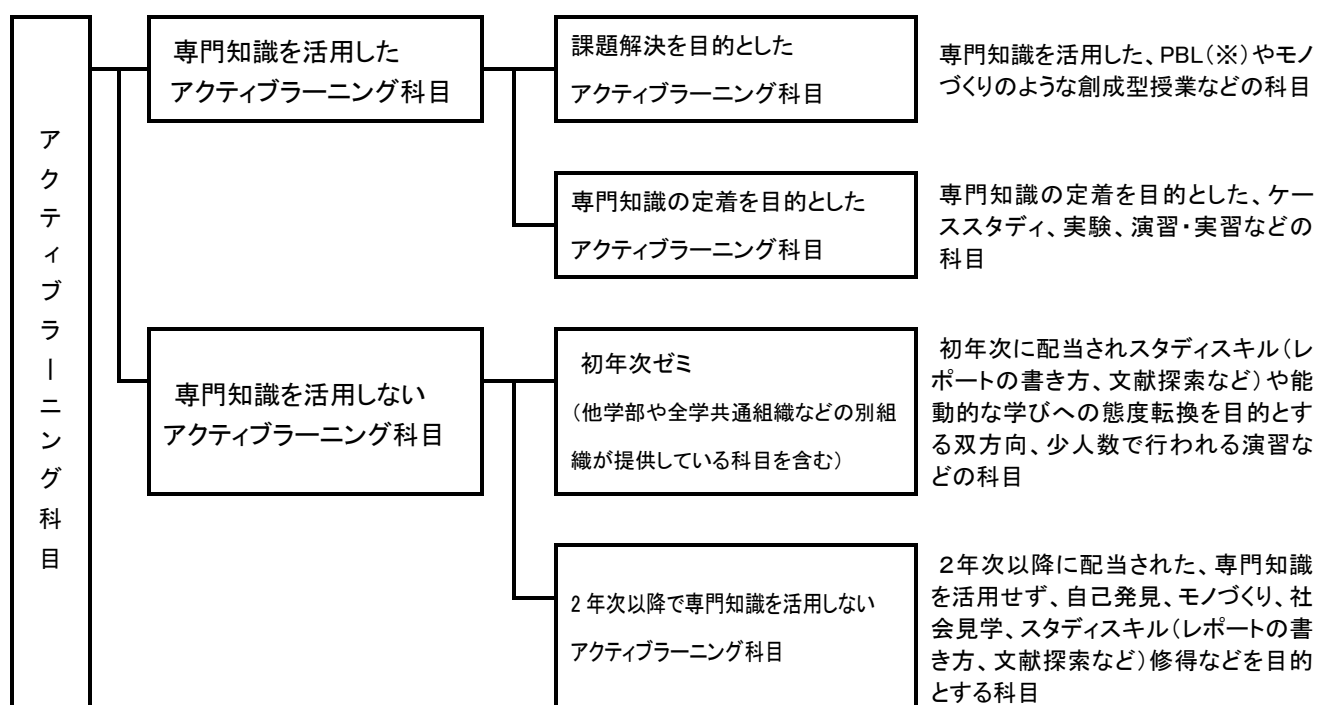
b. 初年次ゼミに関する質問以外では、他学部や全学共通組織が開講している科目は除外する。

(2) 本調査で対象とする「アクティブラーニング科目」の定義

授業形態ごとに、下記の定義に該当するものを「アクティブラーニング科目」とした。

「講義」科目	「グループワーク」、「ディベート」、「フィールドワーク」、「プレゼンテーション」、「振り返り」のアクティブラーニングの5つの形態のうちのいずれかが、全開講回数のうち延べ半数以上で実施されている。
「演習」科目および「実験・実習」科目	「グループワーク」、「ディベート」、「フィールドワーク」、「プレゼンテーション」、「振り返り」のアクティブラーニングの5つの形態のうちのいずれかが、全開講回数のうち延べ半数以上実施されている。

(3) 本調査におけるアクティブラーニング科目の目的別分類とその定義



(※)PBL(project/problem based learning)とは、課題発見・解決型学習のことで、学習者が自ら課題を発見し、その解決を図ることを通して学びを深めるような学習方法。

(4) 質問構成

質問紙での次の用語は、本報告書の本文では次のように置換されている。

「専門知識の定着を目的としたアクティブラーニング科目」→「一般的アクティブラーニング」科目

「課題解決を目的としたアクティブラーニング科目」→「高次のアクティブラーニング」科目

- 1) 初年次ゼミ
- 2) 専門知識を活用し、課題解決を目的としたアクティブラーニング科目
- 3) 卒業論文・卒業研究(卒業制作、卒業設計等も含む)
- 4) 専門ゼミ・専門研究
- 5) 学習成果コンテストについて

(※) 専門知識を活用しないアクティブラーニング科目については、科目分類の定義の趣旨がうまく伝わらず、回答者の解釈がさまざまで、回答内容のばらつきが大きかったため、今回の回答分析からは除外した。

3. 質問紙調査の結果分析

(1) 初年次ゼミ

① 系統別実施状況

- ・初年次科目の履修率をポイントに換算。
- ・必須=6、80%以上=5、60%~80%=4、40%~60%=3、20~40%=2、20%以下=1、履修率の記載なし=1
半期科目は、上記ポイントの2分の1とする。
- ・複数の科目を設置している場合は、ポイントを積み上げ、上限を6点とする。
- ・系統ごとに平均ポイントを算出。

系統	全体		国公立大		私立大	
	対象 学科数	平均 ポイント	対象 学科数	平均 ポイント	対象 学科数	平均 ポイント
文・人文・外国語学系	175	4.5	17	3.9	158	4.6
社会・国際学系	90	5.1	11	4.1	79	5.2
法・政治学系	68	4.4	6	3.3	62	4.5
経済学系	62	4.7	11	3.7	51	4.9
経営・商学系	127	4.7	16	4.1	111	4.8
教育・教員養成系	23	2.8	23	2.8	0	—
理学系	62	3.7	24	3.9	38	3.6
工学系(建築学系を除く)	205	3.9	46	4.1	159	3.8
建築学系	39	3.3	9	3.3	30	3.3
生物生産・応用生命学系	29	4.0	9	4.4	20	3.8
総合・環境・人間・情報学系	82	4.4	11	3.9	71	4.4
全体	962	4.3	183	3.8	779	4.4

2011年度調査と比較すると、国公立大の実施率の平均ポイントが2.9→3.8に軒並み上昇している。これは2012年度調査から全学組織と学部学科提供科目に分けて記入する形式に変更したことにより、国公立大の記載科目が増えたことが要因であり、より実態に近づいたと思われる。

文系での実施率が高く、理系で低い傾向は、2011年度調査と同様である。

理系学科の場合、初年次ゼミ科目が必修で設置されていても、半期1科目のみという学科が多く、平均ポイントを下げる要因となっている。初年次から必修の専門基礎科目なども多く設置されており、通期で必修の初年次ゼミを開講する余裕がないと推測される。

社会・国際学系、経済系、経営・商系、総合・環境・人間・情報学系、文・人文・外国語系などが高く、教育・教員養成系、建築系、理学系などが低い。これは2011年度調査でも表れていた学系別の傾向であり、2012年度調査によっても再確認された。

② 初年次ゼミ科目に含まれるアクティブラーニングの形態

- ・科目ごとにアクティブラーニングの要素の頻度をポイントに換算。
- ・頻度大=3、頻度中=2、頻度小=1、記載なし=0
- ・系統ごとに平均ポイントを算出。

全体	対象 科目数	グループ 学習	ディベート	フィールド ワーク	プレゼン テーション	振り返り	時間外 学習
文・人文・外国語学系	377	1.7	1.2	0.7	1.8	1.5	1.8
社会・国際学系	203	2.1	1.6	1.2	2.0	1.7	1.8
法・政治学系	134	1.9	1.5	0.8	1.9	1.5	1.6
経済学系	112	1.8	1.3	0.8	1.8	1.6	1.6
経営・商学系	246	1.9	1.2	0.8	1.8	1.5	1.6
教育・教員養成系	47	2.0	1.2	1.2	1.6	1.6	1.4
理学系	126	1.8	1.2	0.8	1.8	1.8	1.7
工学系(建築学系を除く)	452	1.9	1.2	1.1	1.4	1.4	1.5
建築学系	101	1.8	1.0	1.3	1.5	1.3	1.4
生物生産・応用生命学系	57	2.2	1.4	1.4	1.5	1.4	1.6
総合・環境・人間・情報学系	164	1.9	1.3	1.1	1.9	1.4	1.5
全体	2019	1.9	1.3	1.0	1.7	1.5	1.6

国公立	対象 科目数	グループ 学習	ディベート	フィールド ワーク	プレゼン テーション	振り返り	時間外 学習
文・人文・外国語学系	28	2.1	1.8	0.5	2.5	0.7	1.8
社会・国際学系	32	1.9	1.3	1.2	1.6	1.6	1.5
法・政治学系	8	2.9	2.8	1.5	2.5	1.9	2.1
経済学系	15	2.2	1.5	1.3	2.2	1.7	1.8
経営・商学系	26	1.7	1.2	0.8	2.0	1.5	1.2
教育・教員養成系	47	2.0	1.2	1.2	1.6	1.6	1.4
理学系	38	1.2	1.1	0.7	2.0	1.4	1.4
工学系(建築学系を除く)	134	1.6	1.1	1.0	1.1	1.0	1.4
建築学系	30	2.0	0.8	0.9	1.3	1.2	1.2
生物生産・応用生命学系	31	2.1	1.3	1.4	1.5	1.5	1.5
総合・環境・人間・情報学系	18	2.2	1.6	1.3	1.9	1.8	1.8
全体	407	1.8	1.2	1.0	1.6	1.3	1.4

私立	対象 科目数	グループ 学習	ディベート	フィールド ワーク	プレゼン テーション	振り返り	時間外 学習
文・人文・外国語学系	349	1.6	1.2	0.7	1.8	1.6	1.8
社会・国際学系	171	2.1	1.7	1.2	2.1	1.7	1.9
法・政治学系	126	1.8	1.4	0.7	1.8	1.5	1.6
経済学系	97	1.8	1.3	0.7	1.8	1.6	1.5
経営・商学系	220	1.9	1.3	0.8	1.8	1.5	1.6
教育・教員養成系	0	—	—	—	—	—	—
理学系	88	2.0	1.3	0.9	1.7	2.0	1.8
工学系(建築学系を除く)	318	2.0	1.3	1.1	1.5	1.6	1.6
建築学系	71	1.7	1.1	1.4	1.6	1.3	1.5
生物生産・応用生命学系	26	2.3	1.5	1.4	1.6	1.3	1.7
総合・環境・人間・情報学系	146	1.9	1.2	1.1	1.8	1.4	1.5
全体	1612	1.9	1.3	0.9	1.7	1.6	1.7

2011 年度調査同様、グループ学習、プレゼンテーションのポイントが高い。ほとんどの学科系統で導入が進んでいる。これは「受動的な学びから能動的な学び」への態度変容が課題となる初年次ゼミにおいては、「グループワーク」→「プレゼンテーション」が基本形として定着していることを示している。同時にそのことは、グループワークにおけるファシリテーション能力が教員にとってますます重要化してきているという課題を表現している。

この数値からもう一つ指摘されることは、初年次ゼミでの振り返りの実施率がグループワークほど高くないということである。グループワークを行うことは、対チーム、対自己能力を高めることが目的として設定されているはずであり、自らの関わりを捉え直していく行為がこれらの能力形成に有効であることは明らかになっている。目的設定が適切になされていないか、目的との整合性を欠いていると言わざるを得ない。

③ 初年次ゼミ科目でのレポート返却の実態

全体	対象 科目数	無回答	返却しない	返却は 教員裁量	返却必須	コメント＋ 返却必須
文・人文・外国語学系	377	34%	2%	37%	11%	16%
社会・国際学系	203	28%	1%	51%	7%	13%
法・政治学系	134	37%	7%	44%	7%	4%
経済学系	112	33%	0%	59%	5%	3%
経営・商学系	246	24%	2%	57%	12%	5%
教育・教員養成系	47	30%	0%	53%	4%	13%
理学系	126	33%	6%	40%	5%	15%
工学系(建築学系を除く)	452	27%	8%	36%	8%	21%
建築学系	101	35%	1%	42%	5%	18%
生物生産・応用生命学系	57	25%	9%	35%	9%	23%
総合・環境・人間・情報学系	164	23%	0%	48%	15%	14%
全体	2019	29%	4%	44%	9%	14%

国公立大	対象 科目数	無回答	返却しない	返却は 教員裁量	返却必須	コメント＋ 返却必須
文・人文・外国語学系	28	57%	0%	36%	4%	4%
社会・国際学系	32	19%	0%	53%	9%	19%
法・政治学系	8	25%	0%	75%	0%	0%
経済学系	15	20%	0%	80%	0%	0%
経営・商学系	26	8%	4%	81%	4%	4%
教育・教員養成系	47	30%	0%	53%	4%	13%
理学系	38	34%	8%	55%	0%	3%
工学系(建築学系を除く)	134	47%	4%	25%	6%	18%
建築学系	30	33%	0%	40%	7%	20%
生物生産・応用生命学系	31	39%	0%	26%	16%	19%
総合・環境・人間・情報学系	18	28%	0%	50%	6%	17%
全体	407	36%	2%	43%	6%	13%

私立大	対象 科目数	無回答	返却しない	返却は 教員裁量	返却必須	コメント＋ 返却必須
文・人文・外国語学系	349	33%	2%	38%	11%	17%
社会・国際学系	171	29%	1%	50%	7%	12%
法・政治学系	126	37%	8%	42%	7%	5%
経済学系	97	35%	0%	56%	6%	3%
経営・商学系	220	26%	1%	54%	13%	5%
教育・教員養成系	0	—	—	—	—	—
理学系	88	33%	6%	34%	7%	20%
工学系(建築学系を除く)	318	18%	10%	40%	9%	23%
建築学系	71	35%	1%	42%	4%	17%
生物生産・応用生命学系	26	8%	19%	46%	0%	27%
総合・環境・人間・情報学系	146	23%	0%	47%	16%	14%
全体	1612	28%	4%	44%	10%	14%

教員と学生が双方向で、アクティブな学びを実現しようとするならば、学生が自ら行動した結果であるレポートに教員が具体的に対応することは不可欠のはずである。そして、レポート返却および教員のコメントが、その後の学生の学習へのモチベーションに有意な差があるという調査結果もある。初年次ゼミは、受動的な学びから能動的な学びへの転換点であると位置付けられる。とするならば、その授業で提出されたレポートを教員がコメントを付して返却しない、というあり方そのものに疑問符が付かざるを得ない。

特に文系学科では、卒業論文や専門ゼミを除けば、教養科目や専門科目でのコメント付きレポート返却は少ない。初年次ゼミでこそ、そうした双方向性をしっかりと確保しておくことが重要であろう。

理系については、多くの学科で実験などにおいては、レポートの受理の前に教員とのやり取りが必須化されていて、受理は合格レベルを意味するのが一般的である。初年次ゼミは本来であれば、そうしたやり取りの導入に位置付けられるべきであるが、初年次ゼミで行われていないことが、即、卒業までそのような経験を持たないということの意味するわけではない。その点で事情が異なることを踏まえて、本数値を見るべきである。

④ 初年次ゼミ科目でのファシリテーターとしてのSA・TA導入状況

全体	対象 科目数	無回答	導入して いない	一部の講 座で導入	全講座で 導入
文・人文・外国語学系	377	19%	62%	14%	5%
社会・国際学系	203	20%	55%	15%	11%
法・政治学系	134	15%	53%	26%	6%
経済学系	112	9%	63%	21%	7%
経営・商学系	246	12%	65%	13%	10%
教育・教員養成系	47	21%	49%	19%	11%
理学系	126	17%	33%	27%	23%
工学系(建築学系を除く)	452	8%	38%	22%	31%
建築学系	101	12%	43%	26%	20%
生物生産・応用生命学系	57	28%	46%	18%	9%
総合・環境・人間・情報学系	164	18%	46%	18%	18%
全体	2019	15%	51%	19%	16%

国公立大	対象 科目数	無回答	導入して いない	一部の講 座で導入	全講座で 導入
文・人文・外国語学系	28	4%	93%	4%	0%
社会・国際学系	32	25%	34%	19%	22%
法・政治学系	8	0%	50%	38%	13%
経済学系	15	7%	67%	27%	0%
経営・商学系	26	8%	77%	15%	0%
教育・教員養成系	47	21%	49%	19%	11%
理学系	38	26%	50%	13%	11%
工学系(建築学系を除く)	134	10%	28%	16%	46%
建築学系	30	33%	20%	23%	23%
生物生産・応用生命学系	31	39%	26%	23%	13%
総合・環境・人間・情報学系	18	28%	28%	22%	22%
全体	407	18%	42%	18%	23%

私立大	対象 科目数	無回答	導入して いない	一部の講 座で導入	全講座で 導入
文・人文・外国語学系	349	20%	60%	15%	5%
社会・国際学系	171	19%	58%	14%	9%
法・政治学系	126	16%	53%	25%	6%
経済学系	97	9%	63%	20%	8%
経営・商学系	220	13%	64%	12%	11%
教育・教員養成系	0	—	—	—	—
理学系	88	13%	26%	33%	28%
工学系(建築学系を除く)	318	7%	43%	25%	25%
建築学系	71	3%	52%	27%	18%
生物生産・応用生命学系	26	15%	69%	12%	4%
総合・環境・人間・情報学系	146	16%	49%	17%	18%
全体	1612	14%	53%	19%	14%

ファシリテーターとしての SA や TA の導入は二重の意味を持つ。一つは授業を受ける学生への効果である。教室内で教員一人がファシリテーターとして関わるだけよりも、重層的な関係が構築できて効果が上がる場合が多い。もう一つが SA や TA に対する教育効果である。

この両者が双方とも効果を上げるためには、SA や TA に対する研修などの教育的な関わりが不可欠であるが、軌道に乗ってくれば教員の負担は大きく軽減される。

こうしたメリットがあるが、現状では導入は少数に止まっている。とりわけ、文・人文・外国語学系、法・政治学系、経済学系では全講座で導入は 5~7%に止まっている。対して、工学系では 31% など、総じて理系科目は専門科目や実験での TA 導入が一般的であるためか、高い数値が示されている。

⑤ 初年次ゼミ科目を複数教員で担当する場合の授業設計の標準化

- ・複数教員が担当している科目について、授業設計の標準化にかかわる4つの項目の共通化を実施している率を算出

系統	全体				
	対象 科目数	共通 シラバス	共通 テキスト	共通 テスト	共通 評価基準
文・人文・外国語学系	295	54%	33%	17%	41%
社会・国際学系	177	72%	33%	15%	46%
法・政治学系	117	67%	33%	12%	47%
経済学系	102	60%	24%	9%	43%
経営・商学系	214	67%	33%	13%	42%
教育・教員養成系	37	76%	14%	3%	41%
理学系	97	74%	42%	24%	49%
工学系(建築学系を除く)	362	86%	41%	23%	69%
建築学系	74	85%	15%	5%	55%
生物生産・応用生命学系	46	78%	15%	4%	52%
総合・環境・人間・情報学系	130	73%	38%	13%	54%
全体	1651	71%	33%	16%	51%

系統	国公立					私立				
	対象 科目数	共通 シラバス	共通 テキスト	共通 テスト	共通 評価基準	対象 科目数	共通 シラバス	共通 テキスト	共通 テスト	共通 評価基準
文・人文・外国語学系	18	44%	11%	0%	28%	277	54%	34%	18%	42%
社会・国際学系	26	73%	15%	12%	54%	151	72%	36%	16%	45%
法・政治学系	7	43%	14%	0%	29%	110	68%	35%	13%	48%
経済学系	15	33%	0%	0%	33%	87	64%	28%	10%	45%
経営・商学系	26	50%	15%	8%	27%	188	69%	35%	14%	44%
教育・教員養成系	37	76%	14%	3%	41%	0	—	—	—	—
理学系	25	60%	12%	4%	40%	72	79%	53%	31%	53%
工学系(建築学系を除く)	94	82%	34%	21%	65%	268	88%	44%	24%	70%
建築学系	25	80%	8%	0%	48%	49	88%	18%	8%	59%
生物生産・応用生命学系	25	84%	4%	4%	40%	21	71%	29%	5%	67%
総合・環境・人間・情報学系	17	82%	24%	0%	53%	113	72%	41%	15%	54%
全体	315	71%	18%	9%	48%	1336	71%	37%	17%	51%

この項目について、私立大の方が標準化は進んでいる。

特に、シラバスについては、国公立大の理工系、私立大全系統で、共通化の実施率が高い。

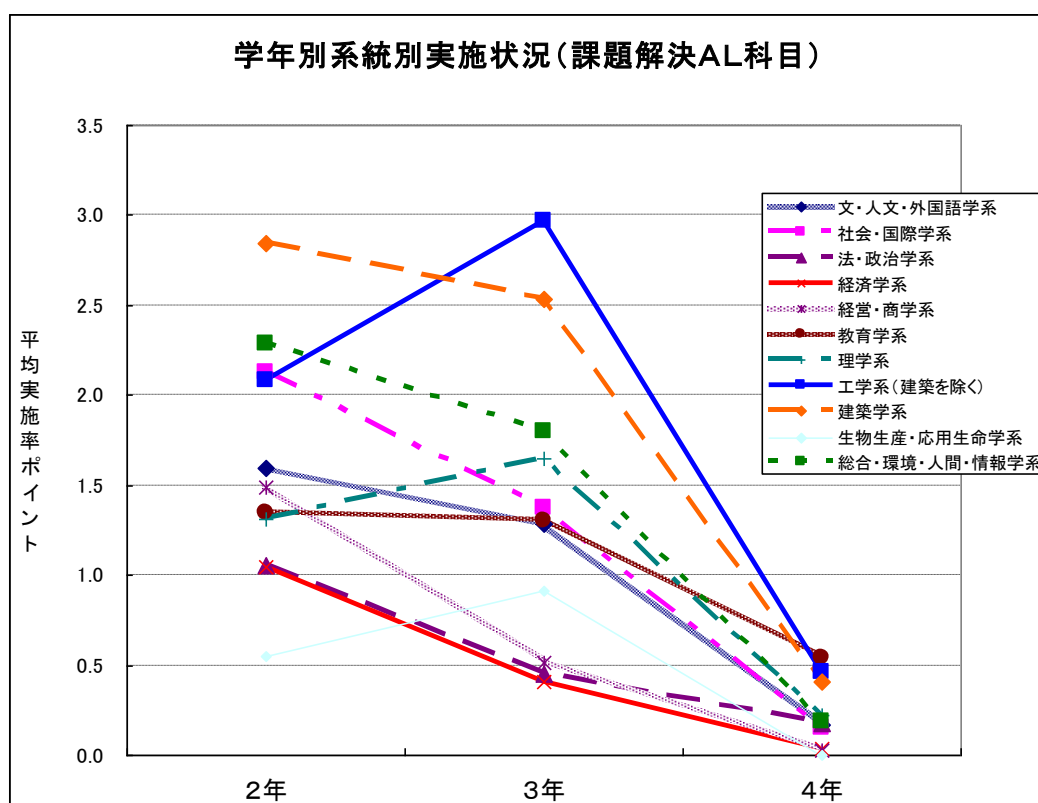
「共通評価基準」については、「採点基準を共通化」や「成績分布基準の共通化」など、取り組みはさまざまであることが推測される。

(2) 課題解決を目的としたアクティブラーニング科目 (高次のアクティブラーニング科目)

① 学年別／系統別実施状況

- ・履修率をポイントに換算
- ・必須=6、80%以上=5、60%~80%=4、40%~60%=3、20~40%=2、20%以下=1、履修率の記載なし=1
半期科目は、上記ポイントの2分の1とする。
- ・1学年で複数の科目を設置している場合はポイントを積み上げ、1学年の上限を6点とする。
- ・学年、系統ごとに平均ポイントを算出。

系統	全体				国公立大				私立大			
	対象 学数	2年平均 実施率 ポイント	3年平均 実施率 ポイント	4年平均 実施率 ポイント	対象 学数	2年平均 実施率 ポイント	3年平均 実施率 ポイント	4年平均 実施率 ポイント	対象 学数	2年平均 実施率 ポイント	3年平均 実施率 ポイント	4年平均 実施率 ポイント
文・人文・外国語学系	175	1.6	1.3	0.2	17	0.9	0.1	0.0	158	1.7	1.4	0.2
社会・国際学系	90	2.1	1.4	0.2	11	3.0	0.6	0.0	79	2.0	1.5	0.2
法・政治学系	68	1.1	0.5	0.2	6	1.2	0.3	0.2	62	1.0	0.5	0.2
経済学系	62	1.0	0.4	0.0	11	0.9	0.5	0.2	51	1.1	0.4	0.0
経営・商学系	127	1.5	0.5	0.0	16	1.0	0.2	0.0	111	1.6	0.6	0.0
教育・教員養成系	23	1.3	1.3	0.5	23	1.3	1.3	0.5	0	—	—	—
理学系	62	1.3	1.6	0.2	24	1.1	1.1	0.5	38	1.5	2.0	0.0
工学系(建築を除く)	205	2.1	3.0	0.5	46	2.3	3.3	0.9	159	2.0	2.9	0.3
建築学系	39	2.8	2.5	0.4	9	1.3	1.8	0.1	30	3.3	2.8	0.5
生物生産・応用生命学系	29	0.6	0.9	0.0	9	1.4	2.3	0.0	20	0.2	0.3	0.0
総合・環境・人間・情報学系	82	2.3	1.8	0.2	11	3.2	2.6	0.3	71	2.1	1.7	0.2
全体	962	1.7	1.5	0.2	183	1.7	1.6	0.4	779	1.7	1.5	0.2



全体的には2年次のポイントが最も高くなる傾向にある。ただし、文系学科では一律2年次のポイントが最も高くなっている一方で、理系学科のうち理学系、工学系（建築除く）および生物生産・応用生命学系では3年次のポイントが最も高くなっており、学部系統により傾向が異なる（各系統で最もポイントが高い学年に網掛け）。

工学系（建築除く）全体では、3年次のポイントが3.0ポイントと、他の系統の各年次のポイントと比較してもとりわけ高い。このことは、1年次と2年次では知識を覚え、3年次になってからその知識の活用が始まるという伝統的なカリキュラム設計が根強く存在することを示唆している。

また、建築学系全体では2年次のポイントが最も高いが、3年次のポイントも他の系統の各年次のポイントと比較しても高い部類に含まれる。このことから、建築学系では知識の獲得と、それを活用し課題解決を図るアクティブラーニング科目が、並行して進められていることが推測できる。

ただ、全体として、この項目では専門ゼミ・専門研究を除いていることに留意されたい。理由は前述しているように、可視化されていないため検証不能であることによる。専門ゼミ・専門演習と初年次ゼミを加味すると、(3) ②のように、2年次の谷間が浮かび上がり、別の様相を呈してくる。

② 活用すべき専門知識を伝達する科目の記入状況

- ・課題解決を目的としたアクティブラーニング科目において、活用すべき専門知識を伝達する科目の記入状況を系統別にまとめる。
- ・「同科目」や「全科目」などの回答も含めている。

系統	全体			国公立大			私立大		
	活用科目 記入	活用科目 未記入	活用科目 記入率	活用科目 記入	活用科目 未記入	活用科目 記入率	活用科目 記入	活用科目 未記入	活用科目 記入率
文・人文・外国語学系	294	181	61.9%	30	13	69.8%	264	168	61.1%
社会・国際学系	177	69	72.0%	36	2	94.7%	141	67	67.8%
法・政治学系	71	51	58.2%	10	4	71.4%	61	47	56.5%
経済学系	65	50	56.5%	13	7	65.0%	52	43	54.7%
経営・商学系	197	106	65.0%	9	11	45.0%	188	95	66.4%
教育・教員養成系	77	15	83.7%	77	15	83.7%	0	0	—
理学系	87	52	62.6%	32	19	62.7%	55	33	62.5%
工学系(建築を除く)	436	136	76.2%	102	40	71.8%	334	96	77.7%
建築学系	131	31	80.9%	13	3	81.3%	118	28	80.8%
生物生産・応用生命学系	23	23	50.0%	17	3	85.0%	6	20	23.1%
総合・環境・人間・情報学系	233	97	70.6%	45	8	84.9%	188	89	67.9%
全体	1,791	811	68.8%	384	125	75.4%	1,407	686	67.2%

この項目は、高次のアクティブラーニング科目において、課題解決の際に専門知識がしっかりと活用されるような設計になっているか、その一端を問うものである。また、ここには同時に「深い学び」につながるように学びが科目を越えることが意識されているか、科目間の連携についても表現されているはずである。

全体では、活用すべき専門知識を伝達する科目の記入率が極端に低い大学はみられず、教育・教員養成系と建築学系がやや抜きん出ているという結果が示された。

③ 成績評価方法

系統	全体				
	対象 科目数	レポート ・報告書	テスト ・試験	プレゼン ・発表	その他
文・人文・外国語学系	475	58.7%	27.2%	57.7%	14.7%
社会・国際学系	246	78.9%	10.6%	63.8%	15.4%
法・政治学系	122	54.1%	6.6%	54.1%	7.4%
経済学系	115	57.4%	14.8%	47.0%	8.7%
経営・商学系	303	72.6%	25.7%	59.4%	17.8%
教育・教員養成系	92	70.7%	12.0%	66.3%	4.3%
理学系	139	63.3%	24.5%	48.9%	0.7%
工学系(建築を除く)	572	79.9%	19.2%	50.9%	20.8%
建築学系	162	40.1%	5.6%	68.5%	50.0%
生物生産・応用生命学系	46	39.1%	32.6%	30.4%	10.9%
総合・環境・人間・情報学系	330	71.2%	17.6%	56.4%	16.7%
全体	2,602	67.4%	19.0%	56.2%	17.1%

系統	国公立大					私立大				
	対象 科目数	レポート ・報告書	テスト ・試験	プレゼン ・発表	その他	対象 科目数	レポート ・報告書	テスト ・試験	プレゼン ・発表	その他
文・人文・外国語学系	43	70%	12%	35%	7%	432	57.6%	28.7%	60.0%	15.5%
社会・国際学系	38	82%	13%	76%	29%	208	78.4%	10.1%	61.5%	13.0%
法・政治学系	14	71%	0%	71%	0%	108	51.9%	7.4%	51.9%	8.3%
経済学系	20	55%	5%	55%	0%	95	57.9%	16.8%	45.3%	10.5%
経営・商学系	20	55%	0%	60%	10%	283	73.9%	27.6%	59.4%	18.4%
教育・教員養成系	92	71%	12%	66%	4%	0	—	—	—	—
理学系	51	63%	12%	35%	0%	88	63.6%	31.8%	56.8%	1.1%
工学系(建築を除く)	142	81%	4%	42%	26%	430	79.5%	24.2%	53.7%	19.1%
建築学系	16	44%	0%	63%	13%	146	39.7%	6.2%	69.2%	54.1%
生物生産・応用生命学系	20	50%	60%	45%	25%	26	30.8%	11.5%	19.2%	0.0%
総合・環境・人間・情報学系	53	85%	2%	23%	17%	277	68.6%	20.6%	62.8%	16.6%
全体	509	72%	9%	49%	14%	2,093	66.2%	21.4%	58.1%	17.8%

全体として、成果物であるレポート・報告書で評価するという学科が最も多く、次いでプレゼンテーション・発表での評価が多い。高次のアクティブラーニング科目で学生が身につけられるものは、単にペーパーテストだけで測ることができるものだけではないので、テスト・試験での評価は他の評価方法と比べてあまり取り入れられていない。

また、建築学系は他の学科系統とは傾向が異なり、プレゼンテーション・発表による評価が最も多く取り入れられている。これは、成果物が、図面、デザイン、実物、模型などといった作品であるためだと推測される。

④ 課題解決を目的としたアクティブラーニング科目を複数教員で担当する場合の授業設計の標準化

系統	全体				
	対象 科目数	共通 シラバス	共通 テキスト	共通 テスト	共通 評価基準
文・人文・外国語学系	184	27.2%	10.9%	8.2%	32.6%
社会・国際学系	109	45.9%	8.3%	2.8%	35.8%
法・政治学系	35	22.9%	17.1%	5.7%	20.0%
経済学系	29	41.4%	13.8%	0.0%	27.6%
経営・商学系	102	59.8%	37.3%	12.7%	49.0%
教育・教員養成系	19	68.4%	15.8%	5.3%	84.2%
理学系	63	66.7%	63.5%	25.4%	66.7%
工学系(建築を除く)	380	79.2%	49.7%	17.6%	75.3%
建築学系	123	77.2%	22.0%	0.8%	67.5%
生物生産・応用生命学系	12	91.7%	16.7%	16.7%	66.7%
総合・環境・人間・情報学系	151	54.3%	23.8%	12.6%	53.0%
全体	1,207	60.1%	31.0%	11.5%	56.3%

系統	国公立大					私立大				
	対象 科目数	共通 シラバス	共通 テキスト	共通 テスト	共通 評価基準	対象 科目数	共通 シラバス	共通 テキスト	共通 テスト	共通 評価基準
文・人文・外国語学系	16	0.5%	0.0%	0.0%	0.5%	168	26.6%	10.9%	8.2%	32.1%
社会・国際学系	18	15.6%	0.0%	0.0%	13.8%	91	30.3%	8.3%	2.8%	22.0%
法・政治学系	7	2.9%	0.0%	0.0%	2.9%	28	20.0%	17.1%	5.7%	17.1%
経済学系	4	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25	41.4%	13.8%	0.0%	27.6%
経営・商学系	9	3.9%	1.0%	0.0%	2.9%	93	55.9%	36.3%	12.7%	46.1%
教育・教員養成系	19	68.4%	15.8%	5.3%	84.2%	0	—	—	—	—
理学系	21	9.5%	9.5%	0.0%	11.1%	42	57.1%	54.0%	25.4%	55.6%
工学系(建築を除く)	97	19.2%	10.0%	1.8%	19.7%	283	60.0%	39.7%	15.8%	55.5%
建築学系	11	6.5%	0.0%	0.0%	5.7%	112	70.7%	22.0%	0.8%	61.8%
生物生産・応用生命学系	4	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	8	66.7%	16.7%	16.7%	66.7%
総合・環境・人間・情報学系	41	6.6%	0.0%	0.0%	6.0%	110	47.7%	23.8%	12.6%	47.0%
全体	247	11.3%	4.0%	0.7%	11.1%	960	48.8%	27.0%	10.9%	45.2%

この項目は、学科としてどれだけ学生に対してミニマムスタンダード的な質保証を行っているのかを問うものである。即ち、複数クラス開講や複数教員担当の場合、授業ごと教員ごとに教える内容や評価方法がバラバラであるというのでは、質保証とは言えない。そこを、どれだけ学科として組織的に責任を持っているのかが、この数値には表れている。

全体では、工学系（建築を除く）を筆頭に理系での授業設計の標準化の取り組みが進んでいるのに対し、文・人文・外国語学系および法・政治学系では進んでおらず、特にシラバスの共通化が進んでいない点が顕著である。

また、学系を問わず、国公立大学での授業設計の標準化が私立大学に比べて進んでいない。

(3) 専門ゼミ

① 学年別／系統別実施状況

- ・履修率をポイントに換算
 必須=6、80%以上=5、60~80%=4、40~60%=3、20~40%=2、20%以下=1、
 履修率の記載なし=1
 半期科目は、上記ポイントの2分の1とする。
- ・1学年で複数の科目を設置している場合は、ポイントを積み上げ、1学年の上限を6点とする。
- ・学年、系統ごとに平均ポイントを算出。

系統	全体			
	対象 学科数	2年平均 ポイント	3年平均 ポイント	4年平均 ポイント
文・人文・外国語学系	175	2.2	3.8	4.6
社会・国際学系	90	1.8	4.5	4.8
法・政治学系	68	1.1	3.8	4.7
経済学系	62	2.5	4.0	4.7
経営・商学系	127	2.0	4.2	4.9
教育・教員養成系	23	0.0	1.4	3.2
理学系	62	0.9	2.3	4.6
工学系(建築を除く)	205	0.9	2.1	4.2
建築学系	39	0.6	1.8	4.3
生物生産・応用生命学系	29	1.1	3.3	3.4
総合・環境・人間・情報学系	82	1.4	4.2	4.7
全体	962	1.5	3.3	4.5

系統	国公立				私立			
	対象 学科数	2年平均 ポイント	3年平均 ポイント	4年平均 ポイント	対象 学科数	2年平均 ポイント	3年平均 ポイント	4年平均 ポイント
文・人文・外国語学系	17	2.7	4.6	5.6	158	2.1	3.7	4.5
社会・国際学系	11	0.8	5.2	6.0	79	2.0	4.4	4.6
法・政治学系	6	1.4	5.3	4.6	62	1.1	3.7	4.7
経済学系	11	3.4	5.2	5.4	51	2.3	3.7	4.5
経営・商学系	16	3.4	5.6	5.3	111	1.7	4.0	4.9
教育・教員養成系	23	0.0	1.4	3.2	0	—	—	—
理学系	24	0.0	0.6	6.0	38	1.5	3.4	3.8
工学系(建築を除く)	46	0.3	0.9	5.7	159	1.1	2.4	3.8
建築学系	9	0.3	0.6	5.9	30	0.7	2.1	3.8
生物生産・応用生命学系	9	0.3	2.9	5.2	20	1.4	3.5	2.6
総合・環境・人間・情報学系	11	0.8	4.6	6.0	71	1.5	4.1	4.5
全体	183	1.0	2.7	5.4	779	1.6	3.5	4.3

理系は一般的に4年次または3年次後期から研究室配属が行われるため、2年次・3年次は低く4年次で急激に高くなっている。

文系では3年次から専門ゼミが始まり、4年次に連続するというのが基本パターンとなっている。

② 学年別／系統別にみる初年次ゼミ、課題解決型科目、専門ゼミの平均ポイントの合算

系統	全体				
	対象 学科数	1年平均 実施率 ポイント	2年平均 実施率 ポイント	3年平均 実施率 ポイント	4年平均 実施率 ポイント
文・人文・外国語学系	175	4.5	3.8	5.1	4.8
社会・国際学系	90	5.1	3.9	5.9	5.0
法・政治学系	68	4.4	2.2	4.3	4.9
経済学系	62	4.7	3.5	4.4	4.7
経営・商学系	127	4.7	3.5	4.7	4.9
教育・教員養成系	23	2.8	1.3	2.7	3.7
理学系	62	3.7	2.2	3.9	4.8
工学系(建築を除く)	205	3.9	3.0	5.1	4.7
建築学系	39	3.3	3.4	4.3	4.7
生物生産・応用生命学系	29	4.0	1.7	4.2	3.4
総合・環境・人間・情報学系	82	4.4	3.7	6.0	4.9
全体	962	4.3	3.2	4.8	4.7

系統	国公立大				私立大					
	対象 学科数	1年平均 実施率 ポイント	2年平均 実施率 ポイント	3年平均 実施率 ポイント	4年平均 実施率 ポイント	対象 学科数	1年平均 実施率 ポイント	2年平均 実施率 ポイント	3年平均 実施率 ポイント	4年平均 実施率 ポイント
文・人文・外国語学系	17	3.9	3.6	4.7	5.6	158	4.6	3.8	5.1	4.7
社会・国際学系	11	4.1	3.8	5.8	6.0	79	5.2	4.0	5.9	4.8
法・政治学系	6	3.3	2.6	5.6	4.8	62	4.5	2.1	4.2	4.9
経済学系	11	3.7	4.3	5.7	5.6	51	4.9	3.4	4.1	4.5
経営・商学系	16	4.1	4.4	5.8	5.3	111	4.8	3.3	4.6	4.9
教育・教員養成系	23	2.8	1.3	2.7	3.7	0	—	—	—	—
理学系	24	3.9	1.1	1.7	6.5	38	3.6	3.0	5.4	3.8
工学系(建築を除く)	46	4.1	2.6	4.2	6.6	159	3.8	3.1	5.3	4.1
建築学系	9	3.3	1.6	2.4	6.0	30	3.3	4.0	4.9	4.3
生物生産・応用生命学系	9	4.4	1.7	5.2	5.2	20	3.8	1.6	3.8	2.6
総合・環境・人間・情報学系	11	3.9	4.0	7.2	6.3	71	4.4	3.6	5.8	4.7
全体	183	3.8	2.7	4.3	5.8	779	4.4	3.3	5.0	4.5

初年次ゼミと高次のアクティブラーニングと専門ゼミ・専門研究を重ねて4年間の流れで見ると、2年次が谷間になっていること分かる。文系で言えば、1年次に能動的な学びへの転換を行い、3年次・4年次と専門ゼミがある学科が多いのだから、2年次で途切れさせるのは能力形成的にもモチベーション的に見てもデメリットが生じていると思われる。

(4) 卒業論文・卒業研究

① 系統別 卒業論文・卒業研究履修率

- ・学部系統別に卒業論文、卒業研究の取り扱いを比較する。
- ・卒業論文、卒業研究に取り組む学生の割合をポイントに換算
 必須=6、必須ではないが100%の学生が取り組む=6、
 80%以上=5、60~80%=4、40~60%=3、20~40%=2、20%以下=1、
 卒業論文・卒業研究はあるが取り組む学生の割合の記載なし=1、
 卒業論文はない=0
- ・系統ごとに平均ポイントを算出。

系統	全体		国公立		私立	
	対象 学科数	平均履修率 ポイント	対象 学科数	平均履修率 ポイント	対象 学科数	平均履修率 ポイント
文・人文・外国語学系	175	5.0	17	6.0	158	4.9
社会・国際学系	90	5.1	11	5.5	79	5.0
法・政治学系	68	1.8	6	0.7	62	1.9
経済学系	62	3.7	11	4.8	51	3.4
経営・商学系	127	4.1	16	5.0	111	3.9
教育・教員養成系	23	5.7	23	5.7	0	—
理学系	62	5.6	24	5.3	38	5.8
工学系(建築を除く)	205	5.8	46	5.9	159	5.8
建築学系	39	5.8	9	5.9	30	5.8
生物生産・応用生命学系	29	5.5	9	5.9	20	5.4
総合・環境・人間・情報学系	82	5.1	11	6.0	71	4.9
全体	962	4.9	183	5.5	779	4.7

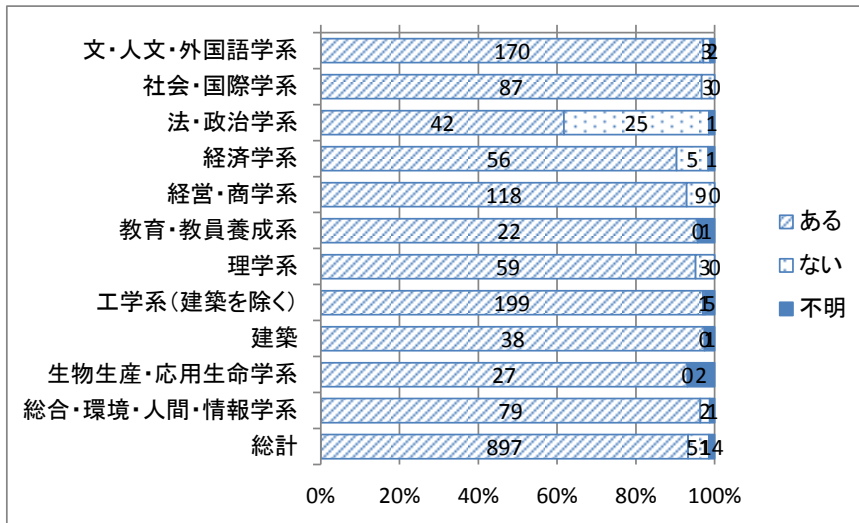
卒業論文・卒業研究の履修率は学系別では法・政治学系が全体平均で他の学系よりも著しく低く1.8ポイントを示した。特に国公立は0.7と私立の1.9をはるかに下回っている。

それ以外では、総じて理系が高く、文系では文・人文・外国語系が高い。

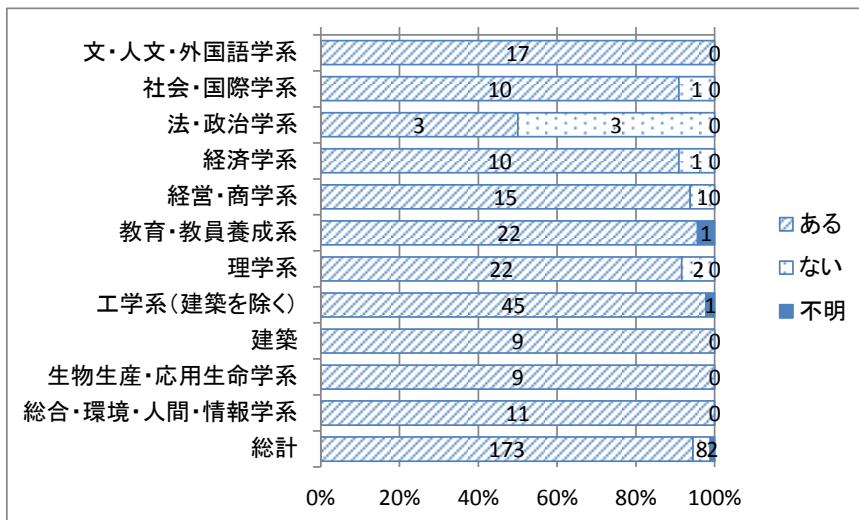
人数も多い経済学系、経営・商学系が法・政治学系を除く他の学系よりも明らかに低く、私立ではより顕著である。この学系は私立においては定員数の多い学部学科が多く、大学の経営的な要となっている場合が多いが、卒業論文までしっかり書かせて送り出す比率は相対的に低いという結果が如実に示されている。

② 卒業論文・卒業研究はありますか？

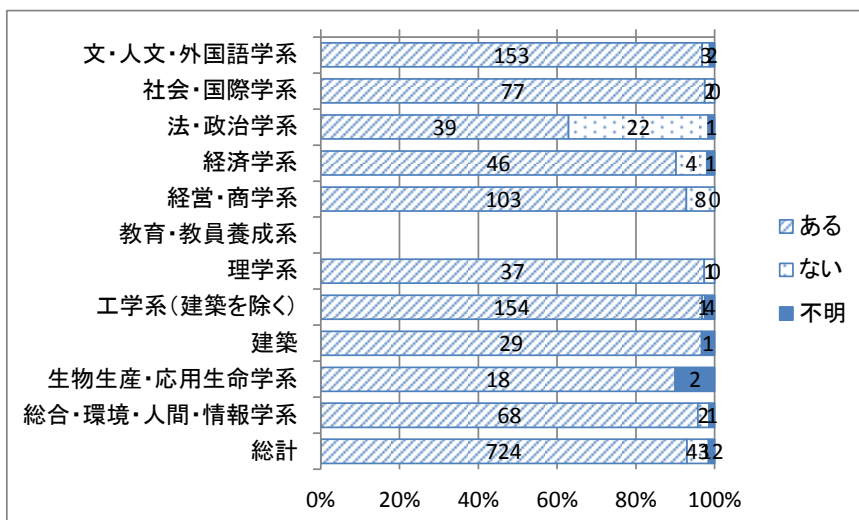
【全体】



【国公立大学】

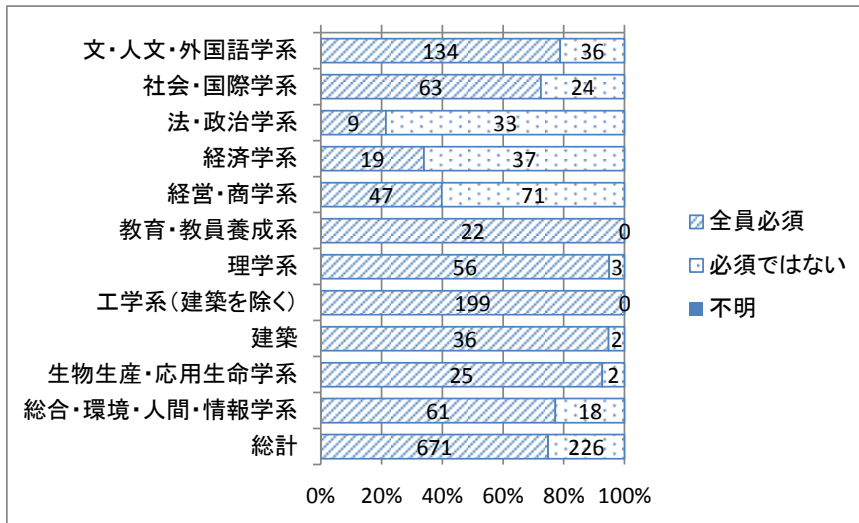


【私立大学】

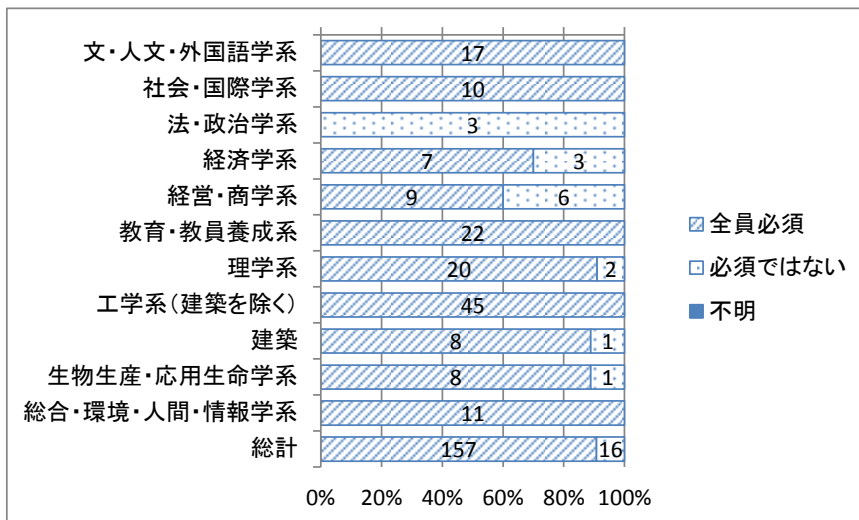


③ [卒論・卒研がある場合] 全員必須（卒業要件）とされていますか？

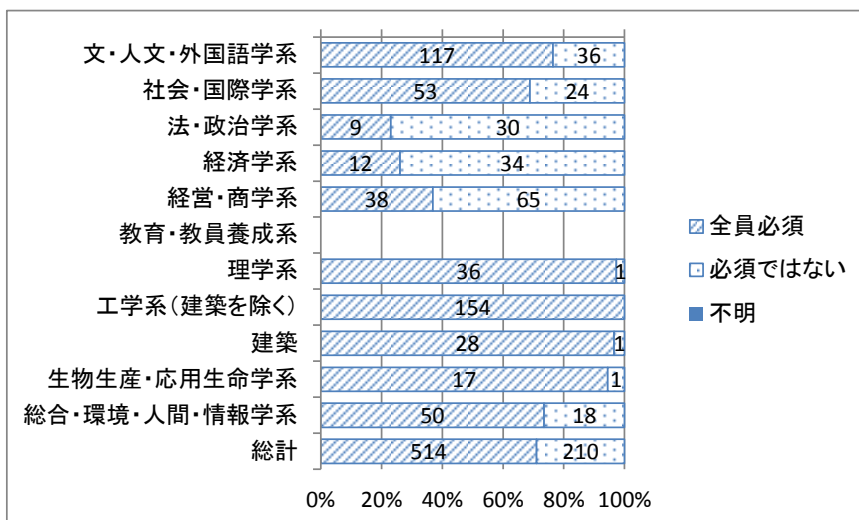
【全体】



【国公立大学】

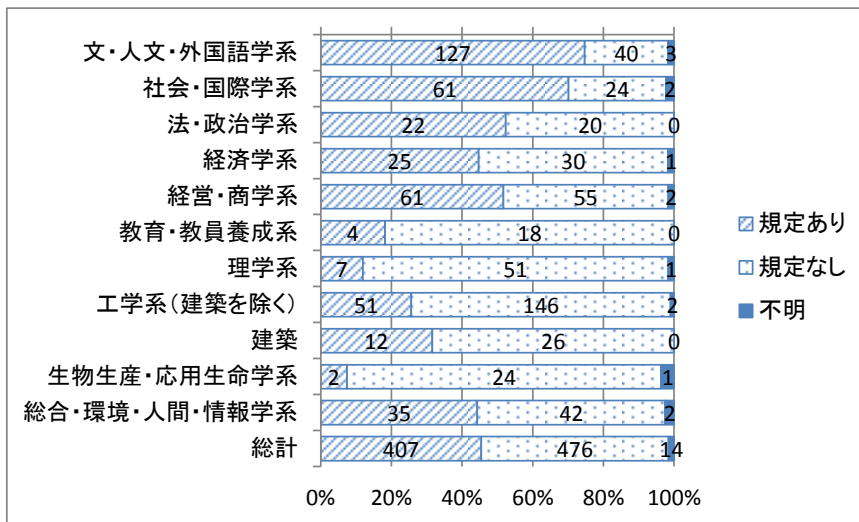


【私立大学】

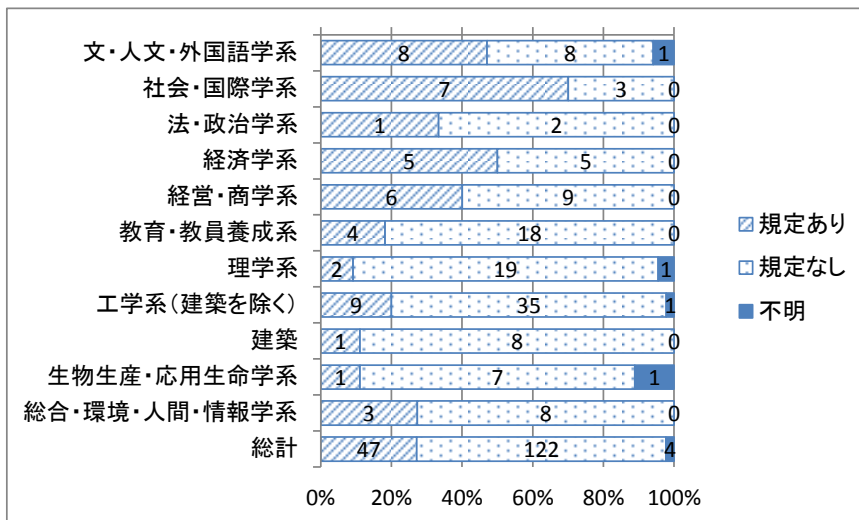


④ [卒論・卒研がある場合] 論文の執筆量などの規定はありますか？

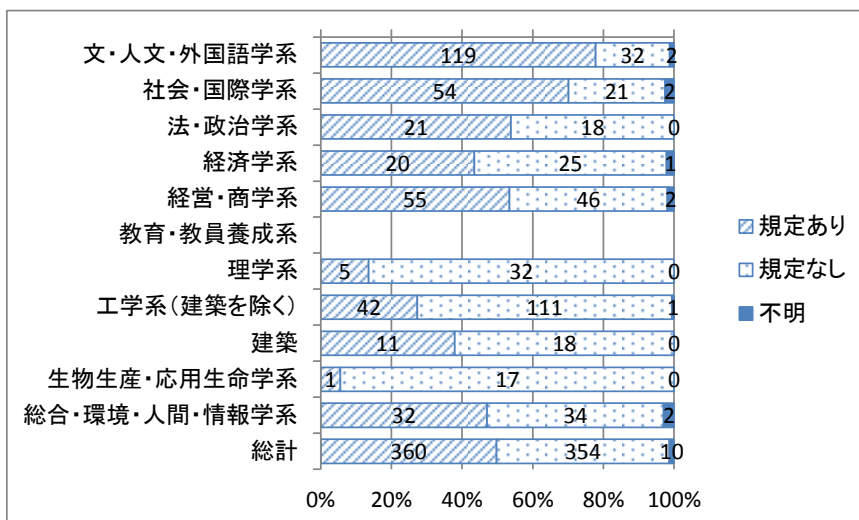
【全体】



【国公立大学】

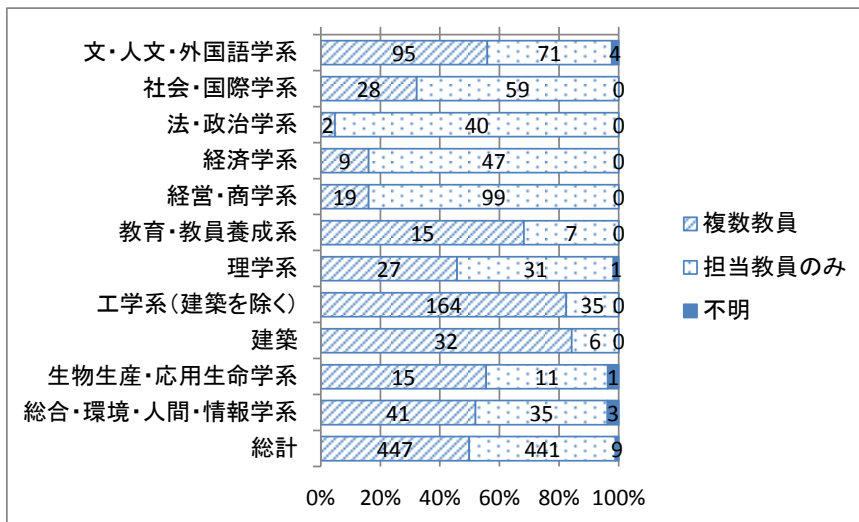


【私立大学】

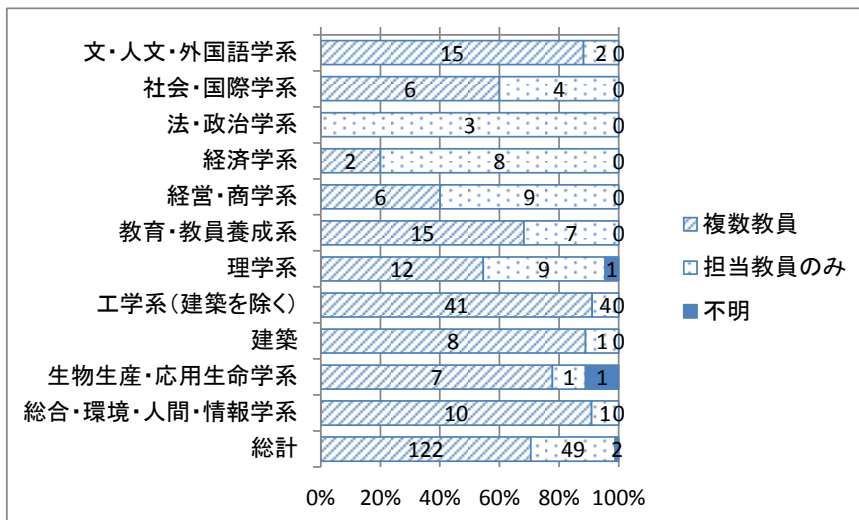


⑤ [卒論・卒研がある場合] その審査は誰が行いますか？

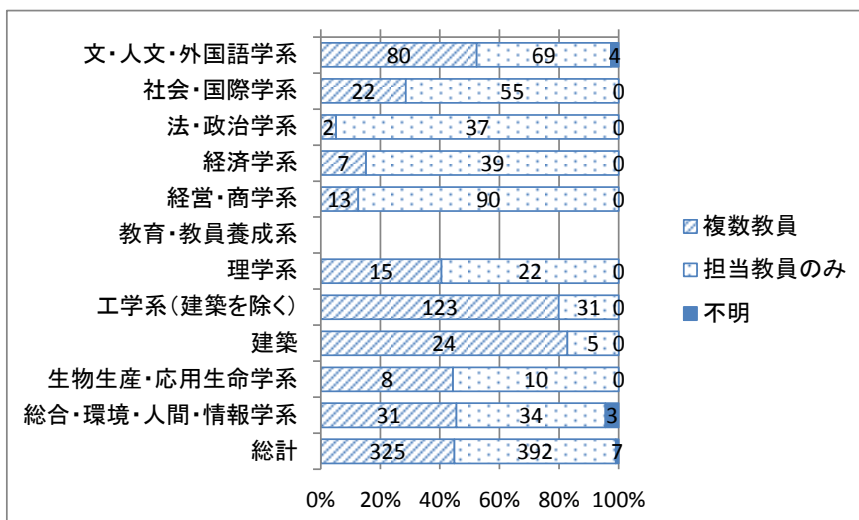
【全体】



【国公立大学】

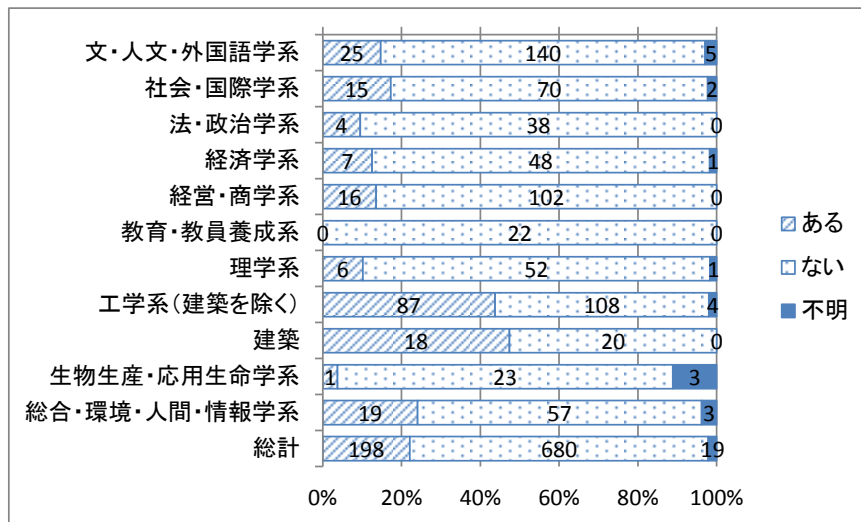


【私立大学】

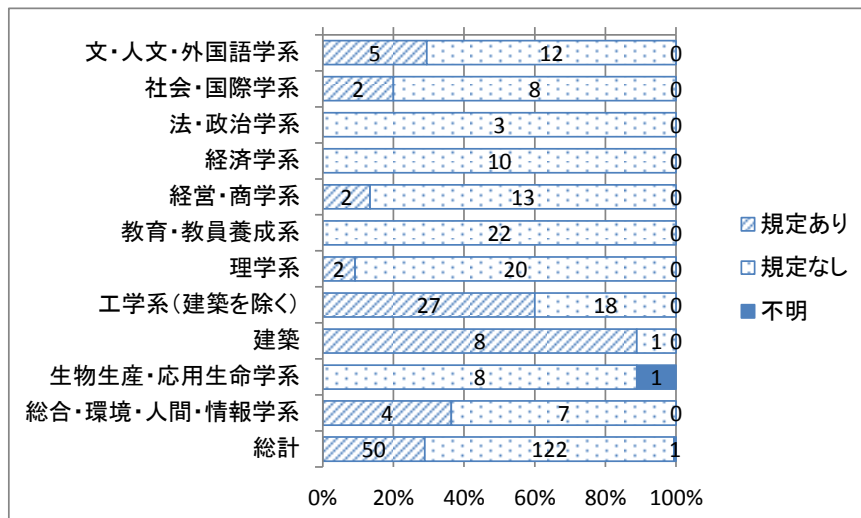


⑥ [卒論・卒研がある場合] 審査（評価）において、明文化された審査（評価）基準チェックシートはありますか？

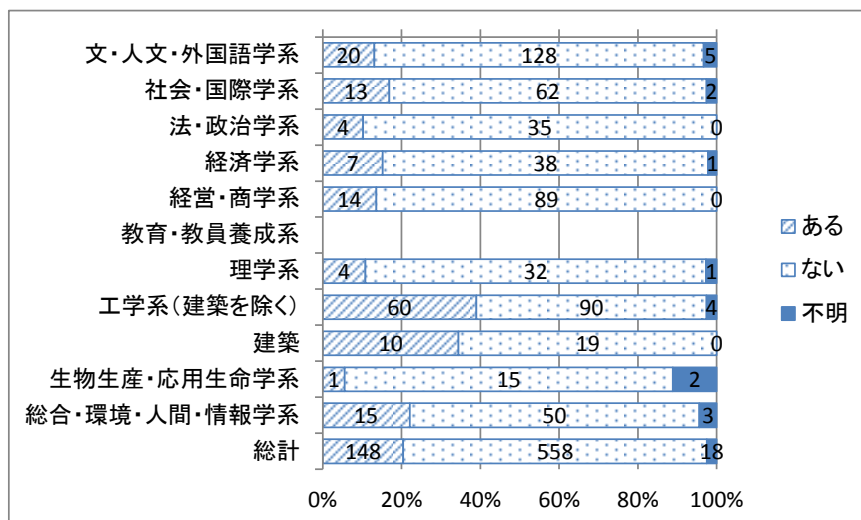
【全体】



【国公立大学】

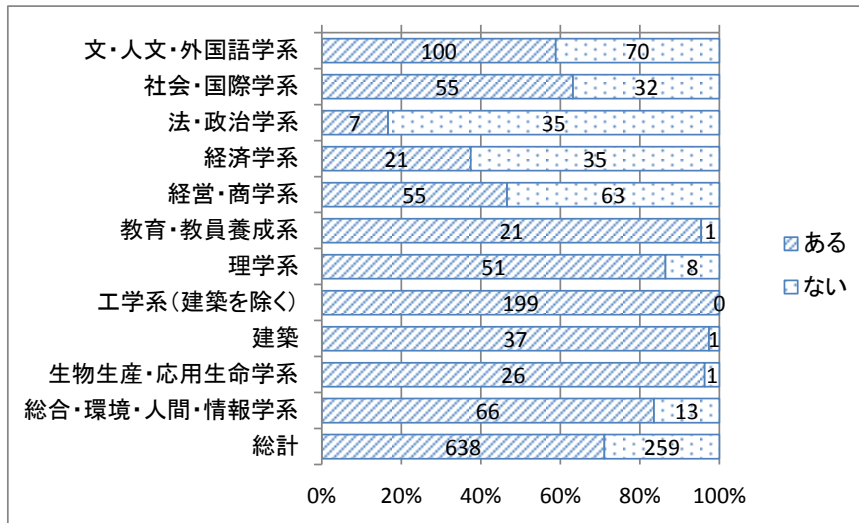


【私立大学】

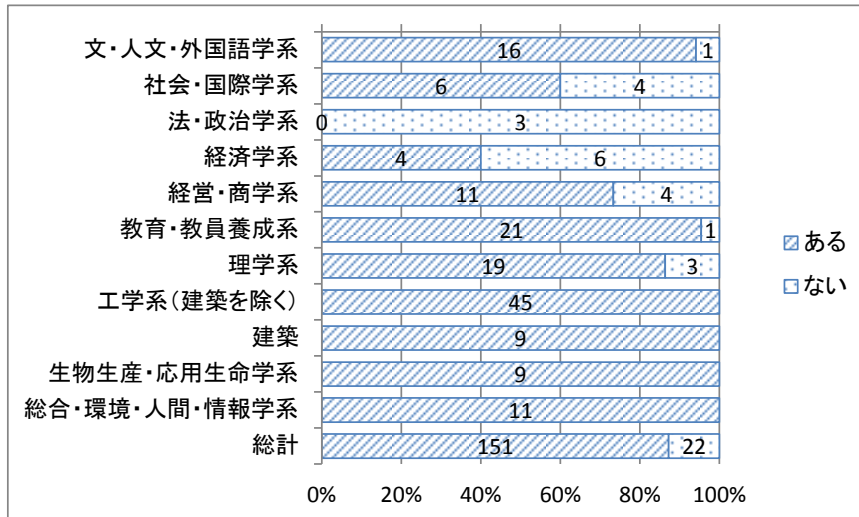


⑦ [卒論・卒研がある場合] 発表の場はありますか？（「ある」＝「卒論・卒研がある」－「卒論（卒研）発表会は行われていない」）

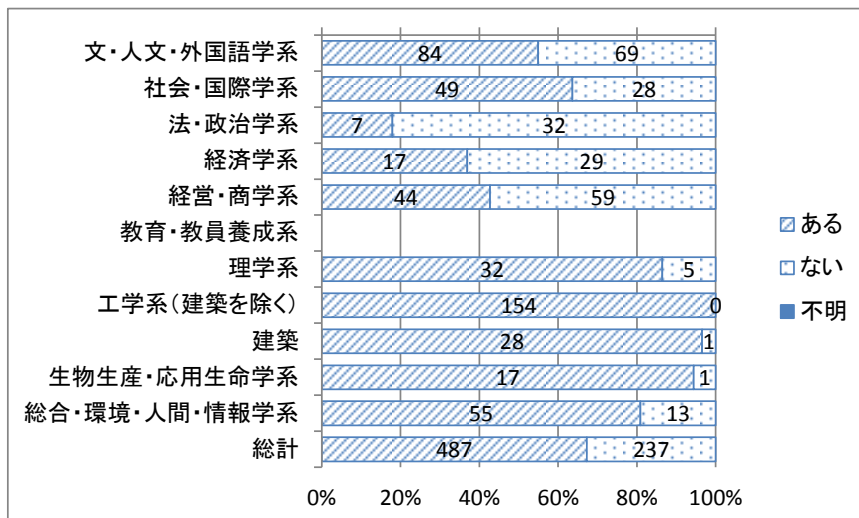
【全体】



【国公立大学】

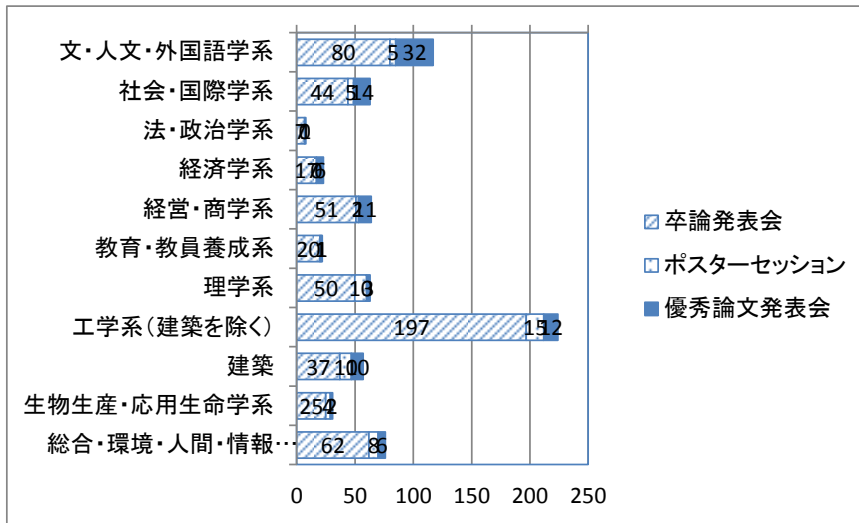


【私立大学】

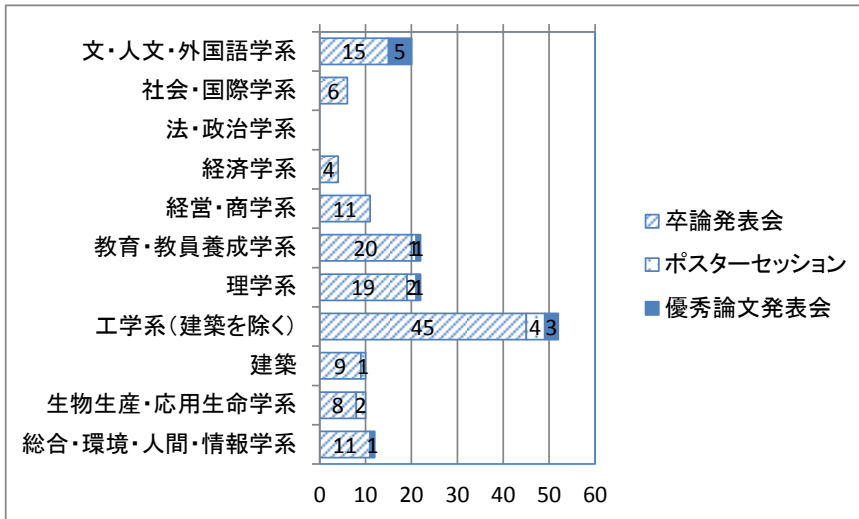


⑧ [卒論・卒研がある場合] かつ [発表の場がある場合] 発表はどのように行われますか？

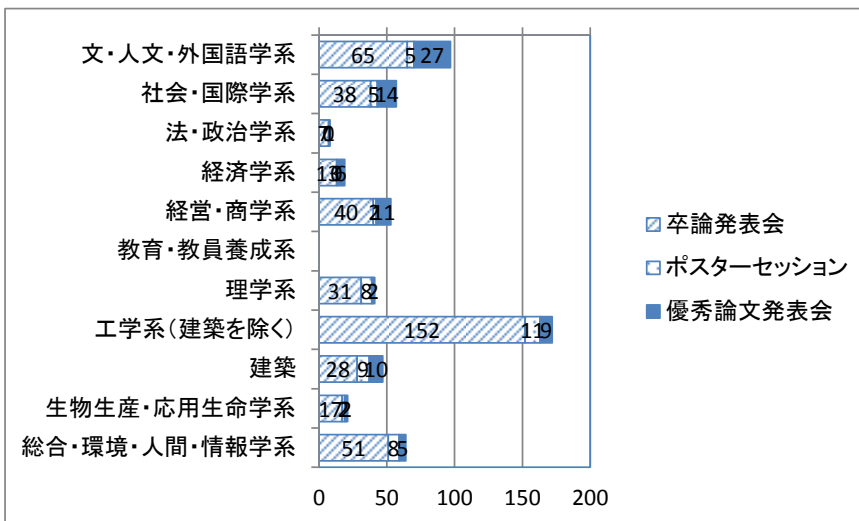
【全体】



【国公立大学】

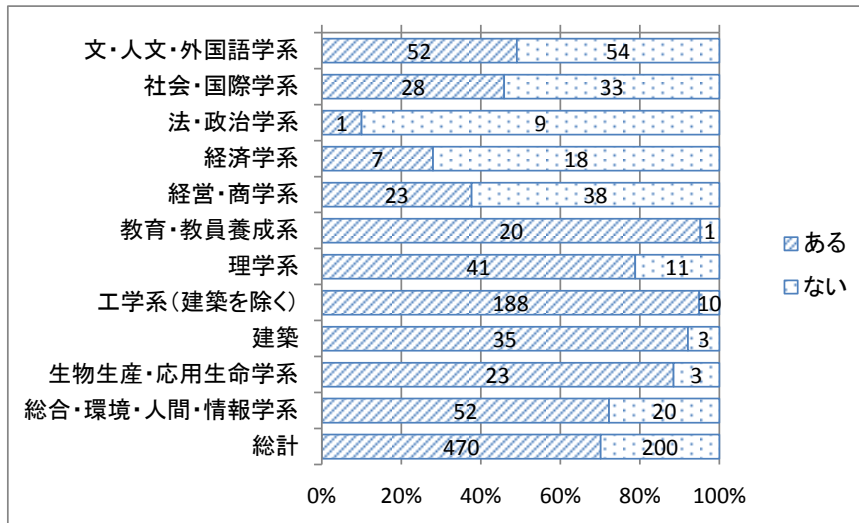


【私立大学】

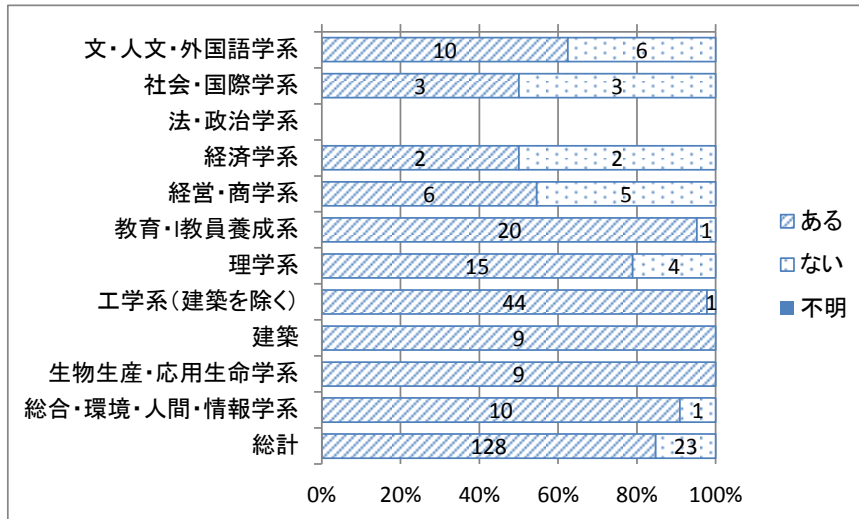


⑨ [卒論・卒研がある場合] かつ [発表の場がある場合] 全員の口頭発表はありますか？

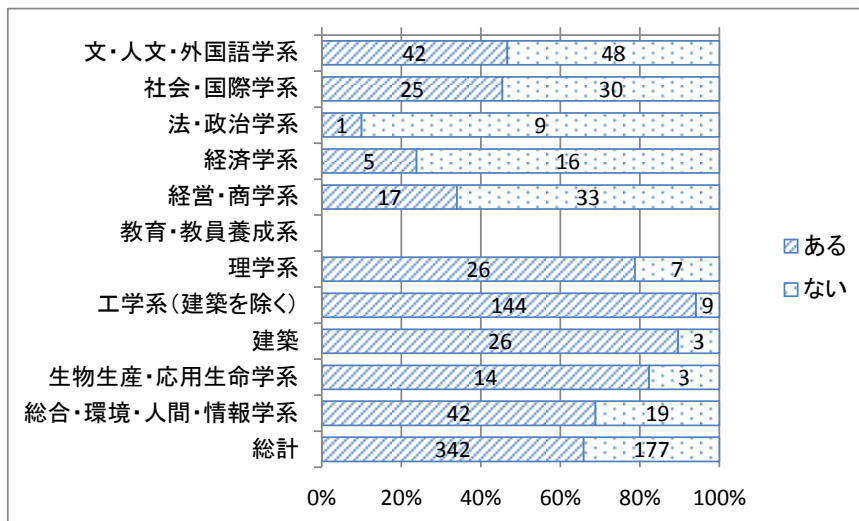
【全体】



【国公立大学】

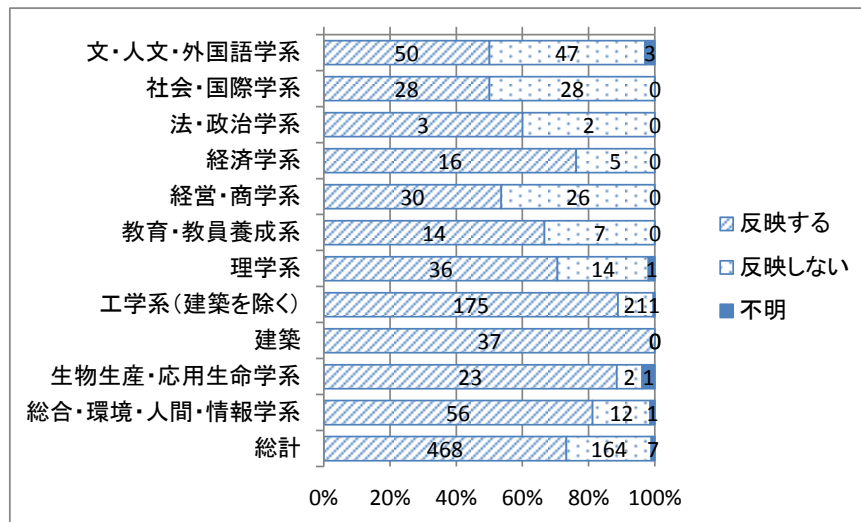


【私立大学】

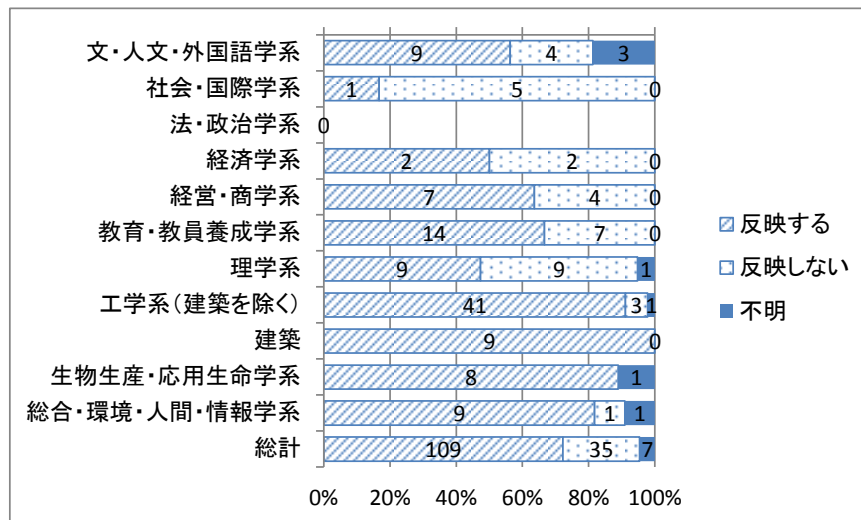


⑩ [卒論・卒研がある場合] かつ [発表の場がある場合] その発表は成績に反映されますか？

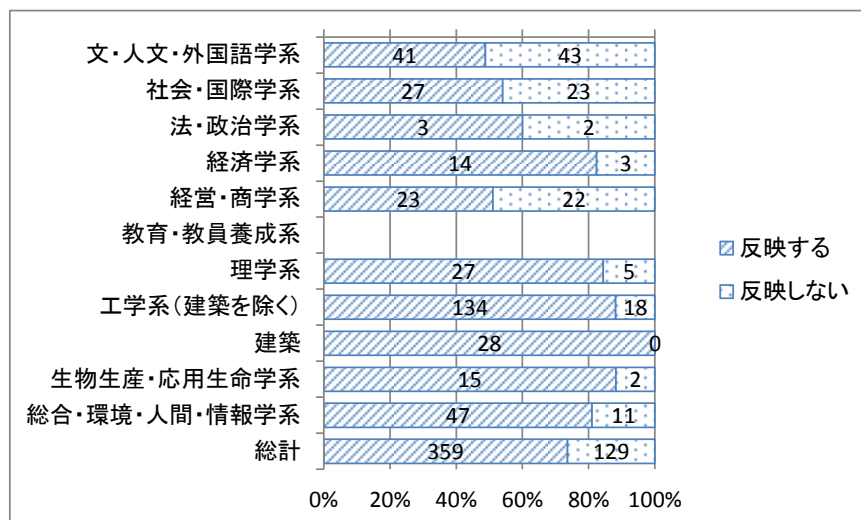
【全体】



【国公立大学】

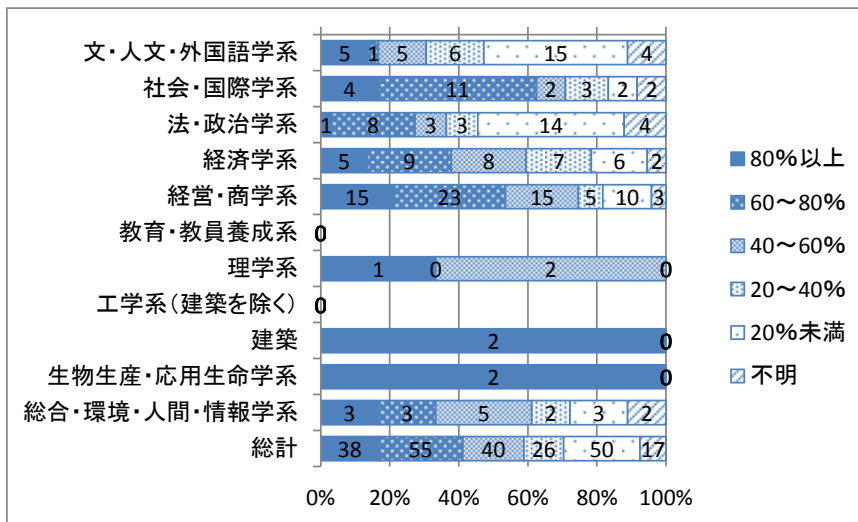


【私立大学】

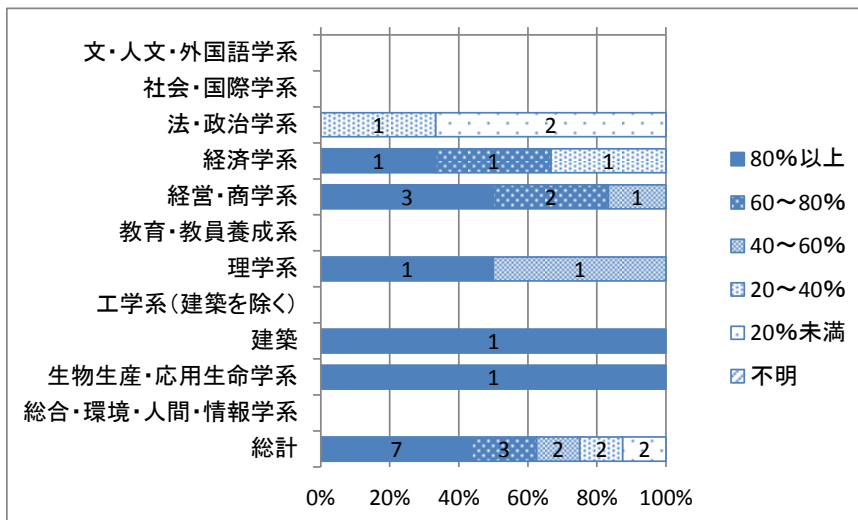


⑪ [卒論・卒研がある場合] かつ [卒論・卒研が必須とされていない場合] 卒論・卒研に取り組む学生の割合はおよそどのくらいですか？

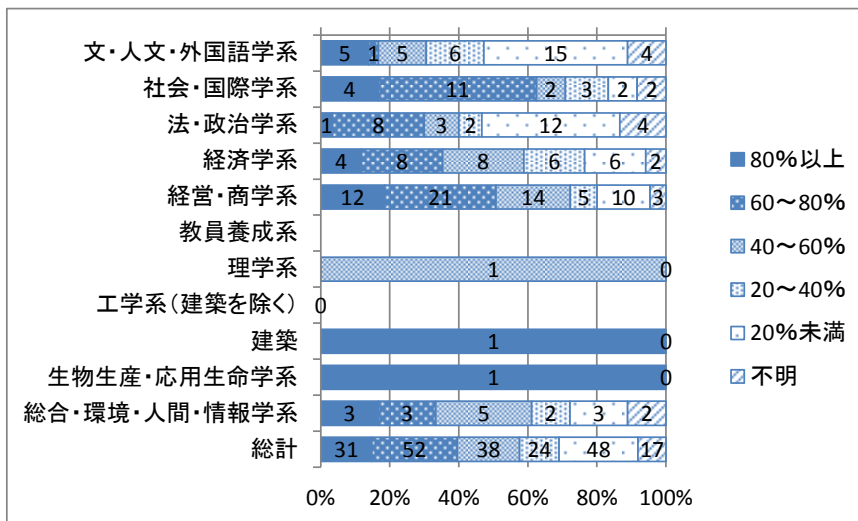
【全体】



【国公立大学】

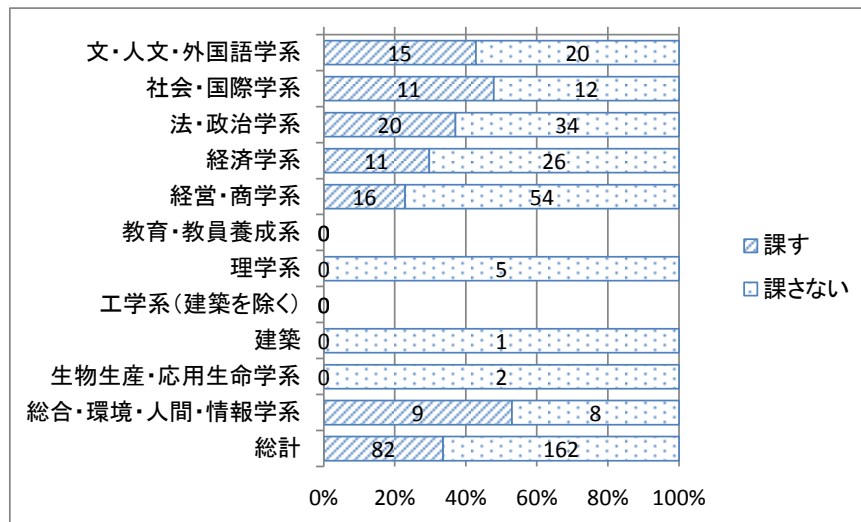


【私立大学】

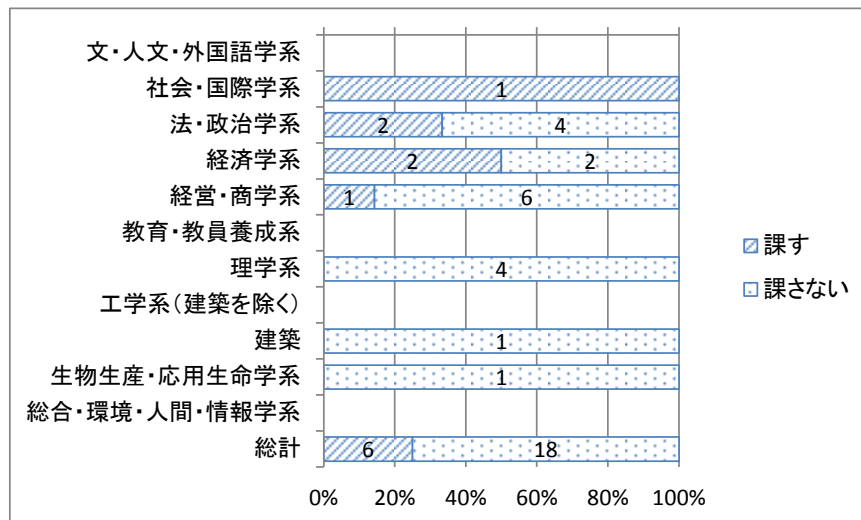


⑫ [卒論・卒研がない場合] または [卒論・卒研が必須とされていない場合] 他に大学での学習の集大成となるような課題を課していますか？

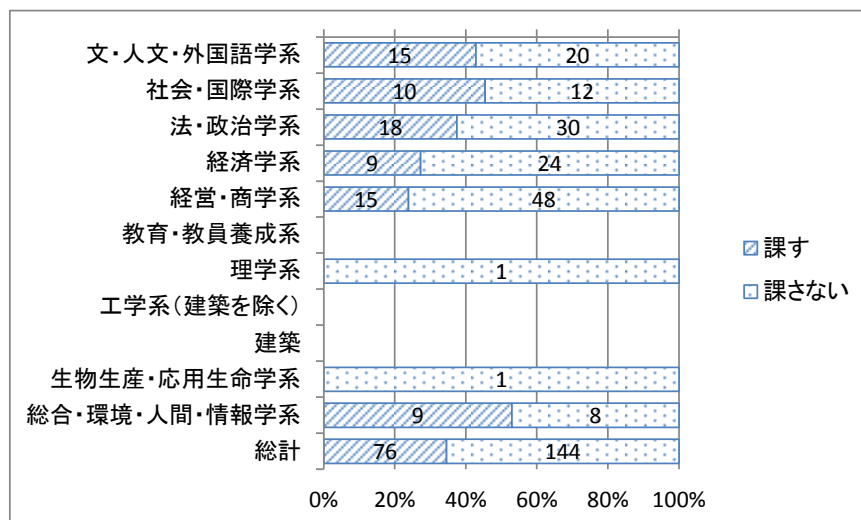
【全体】



【国公立大学】



【私立大学】



(5) 学科の教育目標と、各履修科目の達成目標との関連の明文化

・対象学科数＝アンケート回答学科－当設問無回答の学科

全体	対象 学科数	ある	ない
文・人文・外国語学系	129	48%	52%
社会・国際学系	69	57%	43%
法・政治学系	54	41%	59%
経済学系	46	50%	50%
経営・商学系	99	43%	57%
教育・教員養成系	15	40%	60%
理学系	50	60%	40%
工学系(建築学系を除く)	171	80%	20%
建築学系	33	88%	12%
生物生産・応用生命学系	25	48%	52%
総合・環境・人間・情報学系	63	57%	43%
全体	754	58%	42%

国公立大	対象 学科数	ある	ない	私立大	対象 学科数	ある	ない
文・人文・外国語学系	11	73%	27%	文・人文・外国語学系	118	46%	54%
社会・国際学系	9	56%	44%	社会・国際学系	60	57%	43%
法・政治学系	6	33%	67%	法・政治学系	48	42%	58%
経済学系	10	50%	50%	経済学系	36	50%	50%
経営・商学系	13	23%	77%	経営・商学系	86	47%	53%
教育・教員養成系	15	40%	60%	教育・教員養成系	0		
理学系	18	67%	33%	理学系	32	56%	44%
工学系(建築学系を除く)	41	88%	12%	工学系(建築学系を除く)	130	77%	23%
建築学系	8	100%	0%	建築学系	25	84%	16%
生物生産・応用生命学系	8	63%	38%	生物生産・応用生命学系	17	41%	59%
総合・環境・人間・情報学系	8	0%	100%	総合・環境・人間・情報学系	55	65%	35%
全体	147	61%	39%	全体	607	57%	43%

学科で提供する各履修科目で設定されている達成目標とその学科での教育目標と関連付けられ、かつそれがシラバスなどで明文化されているかということ問う設問である。

法・政治学系および経営・商学系をはじめとした文系学科での実施率が極めて低いのに対し、理系学科の工学系および建築学系では高いことがわかる。